

「I I A S フェロー研究会」第1回研究会
進歩主義の後継ぎはなにか

自己紹介・基調講演

○廣田 研究会を開催させていただきます。

最初に高等研究所副所長でいらっしゃいます北川先生に高等研を代表してご挨拶をお願いします。

○北川 高等研の研究活動について一言申しあげて挨拶に代えさせていただきます。

私は1996年から副所長をしています。私の専門は法律（民法）であります。前の澤田所長のころは、高等研が新しい研究体制を模索する過程で、4年余り所長をたすけていろいろとやってまいりました。金森所長の時代は1年余りになりますが、次のような動きが見えてきつつあると思っております。

高等研は高邁な理念を掲げており、何をやるのかという問いかけ、すなわち高等研のアイデンティティがいつも問題になります。私なりに努力をしてまいりました。まだ道が遠い、率直に言いまして、学際的研究というものはなかなかうまく行かないようですが、私が関係するプロジェクトで私なりに工夫して進めています。

哲学の学際的研究、理系の学際的研究、と比べて法律の学際的研究は、少し性質が違います。一番いい例は著作権問題です。高等研で5、6年かかって著作権という法律問題が人間と社会に関わる基本的なものだということが認識されるようになりました。

さて本日の研究会は、拝見したところ、高等研にとって一つの流れをおつくりいただけるような研究テーマのようで、非常に楽しみに聴かせていただきたいと思っております。何かを生み出していただくことになれば、大変幸いに思います。

以上、簡単ですが終わります。

○廣田 ありがとうございます。

研究会の企画をさせていただきました廣田でございます。どうぞよろしく願いいたします。

第2次世界大戦が終わってから、人類の活動は非常に活発になりまして、かつてないほどの規模になっています。そういうこと自体は大変けっこうなことだと思いますが、あまりに規模が大きくなったものですから、いろいろな問題が出てきております。

例えば、この間ある先生の講演で指摘されびっくりしたわけですが、

石油、石炭は、地球ができてから長年かかってできたものですが、これまでに消費した量の 90%、あるいは 95%は、この 30 年ぐらいの間にされたそうです。こういうことをやっていると、どこかでおかしくなるのではないかと思うわけでございます。

世界中には、先の見通しをよくお持ちの方が多くて、例えば既に 1970 年代の初めに、ローマクラブというものができて、地球の環境問題を、真剣に議論をされたようでございます。それからもう 30 年が経ちました。30 年前と今日では、また一段と状況が変わって来ております。変化のスピードがどんどん早く、激しくなっていると、私は認識しております。

こういう会への発想の根源になりました、私の身の回りのことに触れさせていただきます。私は昨年 3 月の末まで、総合研究大学院大学（総研大）に勤務しておりました。この大学は、大学共同利用機関との連携協力により大学院の教育をするためにできた大学でございます。学校教育法に規定がございまして、研究所に固有の大学院を置くことはできませんので、こういう大学院大学を設置しようという発想でできたわけです。また、共同利用機関は優れた研究所でございますが、それぞれの分野は非常に限られておりますので、複数の大学共同利用機関を跨いで一の大学院大学をつくるのが上策であろうというようなことから設置されたわけでございます。さらに、せっかくこのように優れた大学共同利用機関が集まって一つの活動（大学院教育）をするのですから、その知力を結集して新しい学問領域を創出してみようではないかということを当初から理念として掲げていたわけでございます。昨今、多くの方が、学術の総合化とか文理融合等々を提唱しておられますけれども、総研大は 10 数年前から、そういうことの重要性に気付き、その実現を具体的に実践してきたわけでございます。

総研大の創設は 1988 年（昭和 63 年）10 月でございまして、翌年 1989 年（平成元年）から学生の受け入れを始めたわけでございます。当初は、現在の共同利用機関すべてが整備されていたわけではございませんで、総研大は 6 共同利用機関とスタートしました。それから 3~4 経ったときに、さらに 4 研究所が新たに参加しました。その中の一つに、国際日本文化研究センター（日文研）がございまして。日文研は、本日ご出席いただきました梅原先生の格別なご努力によりできた共同利用機関でございます。総研大にとりまして、この日文研の参加は非常に大きなインパクトがあったと、私は認識しております。これは私が特にそう思っているだけかもしれませんが、梅原先生が総研大を指導してやろうとおっしゃったわけではもちろんありません。恐らく私の片思いでしょう。しかし、梅原先生のご参加により、非常に大きな思想的リーダーシップが得られたと思っております。

先生はたくさんご本を著されておりますし、また講演もしておられます。新聞に折々の問題について適切な発言もされております。私どもが梅原先生の思想を勉

強する材料には事欠かないわけです。私どもは三步下がって、梅原先生の影を踏まないようになどと気を使わなくても、先生の背中をずっと拝見し、先生の思想を勉強することができるわけです。

今年、この国際高等研でフォーラムを開催する機会を与えていただきました。これは絶好のチャンスだ、国際高等研のようなところで梅原先生を囲んで、フォーラムを開くまたとない機会だと思ひまして、おそろおそろ梅原先生に基調講演をお願いに上がりましたところ、ご快諾をいただきまして、そして本日の、この研究会になったわけでございます。

高等研のほうでは、この会議の録音を採らせていただきたいと思いますと言っておりますが、もしみなさま方のご了承が得られるようでしたら、この録音から議事録を作成するように努力をしたいと思っておりますが、いかがでございましょうか。

○梅原他 けっこうです。

○廣田 原稿の段階で先生方に手を入れていただきたいと思いますと思っております。

それでは梅原先生にご講演をいただくわけですが、その前に、ご出席の先生方に自己紹介をお願いしたいと思います。猪木先生からお願いいたします。

○猪木 国際日本文化研究センターの猪木と申します。この3月まで大阪大学経済学部におりました。研究の分野は、労働問題を中心とした経済政策と近代経済史です。よろしくお願いいたします。

○佐藤 佐藤文隆と申します。いま甲南大学理工学部の教授をしていますが、長いあいだ京大で理論物理学、宇宙物理というようなのをやっておりました。ここ数年、「科学と幸福」とか、「科学者の将来」というような本を書いており、科学者の内部から価値観を見直すということに取り憑かれております。そういうことで、本日のお誘いを受けまして、喜んでまいりました。

○鴨下 鴨下と申します。私は学術会議の7部の会員でございしますが、専門は臨床医学の小児科でございします。東大を辞めまして10年近くになります。梅原先生は覚えていらっしゃると思いますが、一度ギルガメッシュの話をも身近で伺ったことがあります。それは、先生が何かの理由で東京にお住まいであったときの話です。大蔵省の住宅がありまして、とてつもなく偉い先生がお一人で滞在していらしているということをも、女性たちが聞きだしてきました。あそこは文部省などの役所の方、東大教授も何人か住んでいましたが、ぜひ梅原先生の話をも伺おうではないかというので、畳敷きの部屋で、大変失礼だったと思うんですけど、今この部屋にいる何倍かの人数、ほとんど全員女性で、私だけが男性でしたが、梅原先生のお話をうかがいました。

○梅原 日文研をつくるために準備のため1年、単身赴任で東京にいたんですよ。真砂町に宿舎があつてね。そのときに連れていかれたんだよね。

○西谷 大阪市立大学の西谷と申します。法律はいろんな分野に分かれておりま

して、私は労働法を担当しています。今日のテーマと直接関係する仕事はしていませんが、廣田先生とは学術会議で、しかも同じ常置委員会でお世話になっている関係で声をかけていただきました。大変光栄に存じております。よろしく願いいたします。

○高畑 総合研究大学院大学の高畑と申します。たぶん一番の若輩で、どうして呼ばれたのか分かりませんが、専門は集団遺伝学、進化の研究をしています。副学長をしておりまして、二刀流でやっているんですけども、なかなかどちらもうまく行かないという状態でちょっと悩んでおります。今日は私の専門の立場から何かお役に立てればと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

○永井 三菱化学生命科学研究所所長の永井でございます。私の専門は、生化学を専門としております。いまの研究所に来て7年ほどになりますが、その前は東京都臨床医学総合研究所の所長をしておりました。それ以前は東大医学部で生科学の教授を10年間ほど務めております。

○濱口 濱口恵俊と申します。この3月まで滋賀県立大学にいましたが、定年で退職いたしました。このメモを見ますと肩書きが3つも書かれておりますが、いまの身分は大変けっこうなもので、＜サンデー毎日＞でございます。専門は日本研究ということで、梅原先生が所長をしておられるころから、そういう領域をずっとやって来ております。しかし、単に日本だけについてだけ考えるのではなくて、もう少し幅広い立場からいろいろ検討を行っております。どうぞよろしく願いします。

○廣田 ありがとうございます。

それでは梅原先生、さっそくお願いいたします。